



(桜井・吉野山)

上之宮遺跡は、桜井市の中心・桜井駅から南方約一・五km、寺川の左岸河岸段丘上に位置している。飛鳥から山田道を経て東国へぬける街道筋に位置し、メスリ山古墳の北二〇〇m、艸墓古墳の東一五〇mにあたる。遺跡の立地は、南・北・西がふさがれた地形で、東は寺川『万葉集』にみえる倉橋川に面し、対岸にやや広い平野を持つ。寺川に舌状に伸びる花崗岩風化土

奈良・上之宮遺跡

うえのみや

- 1 所在地 奈良県桜井市大字上之宮小字井田
- 2 調査期間 一九九〇年(平二)二月～四月
- 3 発掘機関 桜井市文化財協会
- 4 調査担当者 清水眞一
- 5 遺跡の種類 居館跡
- 6 遺跡の年代 六～七世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

の上に、東西約六〇～七〇m・南北約一〇〇mの範囲で、掘立柱建物・柵・石溝・素掘溝等が作られており、飛鳥時代初頭の居館遺構を構成している。海拔高は約一〇〇mである。

上之宮遺跡の発掘調査は、桜井南部特定土地区画整理事業にともなうもので、一九八六年一月から試掘調査を開始し、遺構群の検出にともない、今まで五次にわたる調査を実施した。

第五次調査の結果、四面庇付大型建物の西二〇mの、やや傾斜した低地から、直径六mの半円形の石溝が検出され、石溝に囲まれた内側から、長さ二・六m、幅一・五m、深さ一・五mの方形の石積み遺構が発見された。この方形石積み遺構の低い側(北東部)からは、排水溝状の石溝が北東側にのび、第一次調査で検出していた石溝につながるものがわかった。つまり、半円形の外護状石溝をとまなう方形石積み遺構があり、その排水溝が約五〇m北まで伸びていたわけで、まさに園池遺構と呼ぶべき特殊な庭園が作られていたといえる。すなわち、上之宮遺跡の六世紀末～七世紀初頭期には、主殿とみられる四面庇付大型掘立柱建物、脇殿とみられる東西棟の長廊建物、そして庭園遺構・祭祀遺構、それらを取り囲む柵列や門状遺構がそろっており、格式の上からも、規模・構造の上からも、貴族の邸宅としておかしくないと考えられる。

出土遺物の量は多く、整理用コンテナに約一五〇箱ほど出ている。内容的には須恵器・土師器が大半を占めるが、石積み遺構や石溝か

ら木片・木製品も数多く出土した。主なものに、横櫛・糸巻・斎串形・琴柱形・刀子形・鳥形等の木製品、ベッコウ片等とともに、松明とみられる焦げつきの残る棒状製品が多い。また、遺跡全体から桃核が出土しており、クルミ・クリ・ウメ・ウリ・コメ・ヒヨウタンの等の食用植物の核・皮等が石積み遺構や石溝から出土している。園池遺構埋没後に、多量の土器がその上に棄てられているが、その中には、ガラス玉鈔型・ルツボ・ガラス滓があり、付近にガラス工房のあったことが推定できる。

8 木簡の积文・内容

(1) 別□^{〔金カ〕}塗銀□其項□頭刀十口

160

木簡は、石積み遺構内の、底より二〇cmまでの泥をすべて持ち帰り、水洗した結果、八片に別れた状態で検出した。奈良国立文化財研究所の橋本義則氏により、すべて接合することが判明した。一二



文字のうち三文字が解読しにくい、二番目は「金」かとみられる。木簡は、明らかに削り取った破片で、この左右にも文章が存在したことは、両側に墨痕がみられることから推定できる。おそらく、前に何かの文章、たとえば刀に関する文章があり、それにひきつづいて「別に、金塗銀纏(?)で、其項(?)が□頭の刀を十本」等の意味を持つ木簡ではなからうか。全長一八三mm・幅一八mm・厚み二mmである。

なお、木簡积文は、京都教育大学和田萃氏の积読に、補足させていただいた。

9 関係文献

桜井市文化財協会『上之宮遺跡第五次調査概報』(一九九〇年)

(清水眞二)